

佐賀県 (SG-H)

月日	時間	活動内容
10月29日 (木)	12:55-15:00 16:15-17:15 18:00	羽田空港から佐賀空港へ(ANA453便) 佐賀県副知事表敬訪問 ・副島良彦佐賀県副知事あいさつ ・Mr. Chiv Ratha(カンボジアNL)あいさつ ・記念品交換 ・PYの紹介 ・記念撮影 オリエンテーション・夕食 ホテルニューオータニ佐賀泊
10月30日 (金)	9:30-12:50 13:00-16:00 18:00-20:00	日本・アセアン青年交流プログラム 旧福田家訪問 ・佐賀錦の織物見学と体験 ・日本参加青年による事業説明 ・昼食 西九州大学訪問 ・福元裕二理事長あいさつ ・Mr. Chiv Ratha(カンボジアNL)あいさつ ・PY自己紹介及び各国紹介 ・将来の夢についてディスカッション ・Ms. Phan Khanh Ha (ベトナムAYL)あいさつ 歓迎会及びホームステイ・マッチング(佐賀県教育会館) ・深村友恵佐賀県実行委員会委員長あいさつ ・伊藤正佐賀県くらし環境本部部長あいさつ ・Mr. Azlan Shah Bin A Shafiuddin(マレーシアAYL)あいさつ ・秋山ひろみ佐賀県青年国際交流機構会長乾杯 ・ホームステイ・マッチング ・はがくれ太鼓披露 ・PYによる自国紹介、パフォーマンス ・島村崇佐賀県実行委員会副実行委員長あいさつ
10月31日 (土)		～終日ホームステイ～
11月1日 (日)	10:30 12:30-14:00 15:15	佐賀空港集合 お別れ会 佐賀空港から羽田空港へ(ANA982便) 国立オリンピック記念青少年総合センター着



副島良彦佐賀県副知事を表敬訪問する



旧福田家佐賀錦の織物体験をする

長崎県 (SG-I)

月日	時間	活動内容
10月29日 (木)	13:00-15:05 16:30-17:00 19:00-20:30	羽田空港から長崎空港へ(SNA035便) 長崎県副知事表敬訪問 ・濱本磨毅徳長崎県副知事あいさつ ・Ms. Syafwina(インドネシアNL)あいさつ ・記念品交換 ・記念撮影 オリエンテーション・夕食 長崎ワシントンホテル泊
10月30日 (金)	9:15-16:30 18:10-18:30 18:30-20:30	日本・アセアン青年交流プログラム ・長崎原爆資料館、爆心地公園、平和公園、原爆祈念像見学 ・昼食 ・長崎市内散策 ・ディスカッション ホームステイ・マッチング(諫早市のぞみ会館) 歓迎会(長崎ワシントンホテル) ・山田公美長崎県青年国際交流機構会長あいさつ ・荒木隆いさはや国際交流センター会長あいさつ ・吉田幸広(日本YL)あいさつ ・宮崎誠長崎県教育庁生涯学習課長乾杯 ・PYによるパフォーマンス ・伝統芸能披露(長崎大学龍踊部) ・山田あゆみ実行委員会委員長あいさつ
10月31日 (土)		~ 終日ホームステイ ~
11月1日 (日)	11:45 13:00-14:35 15:45	長崎空港集合 お別れ会 長崎空港から羽田空港へ(JAL610便) 国立オリンピック記念青少年総合センターへ移動



ホストファミリーとの集合写真



長崎市内を散策する

熊本県 (SG-J)

月日	時間	活動内容
10月29日 (木)	13:00-14:50 16:30-17:30 18:00	羽田空港から熊本空港へ(JAL631便) 熊本県庁表敬訪問 ・中園三千代熊本県環境生活部県民生活局長あいさつ ・Mr. Zuraimi Bin Abdul Basheer(シンガポールNL)あいさつ ・出席者紹介 ・記念品交換 ・記念撮影 オリエンテーション・夕食 三井ガーデンホテル熊本泊
10月30日 (金)	9:00-16:00 18:30-20:00	日本・アセアン青年交流プログラム ・和菓子作り体験(くまもと工芸会館) ・熊本大学学生の案内による川尻町街並み散策 ・昼食 ・アイスブレイクと各国紹介(熊本市南区役所) ・田中尚人熊本大学准教授によるワークショップ及びディスカッション 歓迎会及びホームステイ・マッチング(三井ガーデンホテル熊本) ・ホームステイ・マッチング ・開田哲生熊本県くらしの安全推進課長あいさつ ・Mr. Khant Min Thaw (ミャンマーPY)あいさつ ・村本きよみ日本青年国際交流機構九州ブロック幹事乾杯 ・伝統芸能「代継太鼓」パフォーマンス ・PYによるパフォーマンス ・西田香菜子熊本県受入実行委員長あいさつ ・記念撮影
10月31日 (土)		～終日ホームステイ～
11月1日 (日)	10:00 12:55-14:25 15:45	熊本空港集合 お別れ会 熊本空港から羽田空港へ(ANA646便) 国立オリンピック記念青少年総合センターへ移動



中園三千代熊本県環境生活部県民生活局長を表敬訪問する



熊本大学にてディスカッションした内容をまとめる

北九州市 (SG-K)

月日	時間	活動内容
10月29日 (木)	14:50-15:50 17:00-20:00	羽田空港から北九州空港へ(SFJ 081便) オリエンテーション・夕食 ホテルクラウンパレス小倉泊
10月30日 (金)	9:40-16:30 18:00 18:40-20:00	日本・アセアン青年交流プログラム ・北九州エコタウンセンター見学 ・いのちのたび博物館見学 ・昼食 ・イノベーションギャラリー見学 ・意見交換 北九州市表敬(ホテルクラウンパレス小倉) ・近藤晃北九州市子ども家庭局長あいさつ ・Mr. Damrong Jaiyot(タイNL)あいさつ ・記念品交換 ・記念撮影 歓迎会及びホームステイ・マッチング(ホテルクラウンパレス小倉) ・近藤晃北九州市子ども家庭局長あいさつ ・Mr. Andika Sasmita Pratama(インドネシアYL)あいさつ ・ホームステイ・マッチング ・ホストファミリー代表乾杯 ・小倉祇園太鼓「好きっちゃ倶楽部」 ・秋吉和代北九州市受入実行委員長あいさつ
10月31日 (土)		～ 終日ホームステイ～
11月1日 (日)	12:00 13:45-15:15 16:30	北九州空港集合 お別れ会 北九州空港から羽田空港へ(SFJ 082便) 国立オリンピック記念青少年総合センターへ移動



近藤晃北九州市子ども家庭局長を表敬訪問する



北九州の魅力を発表する参加青年

2 参集式・歓迎レセプション

10月28日12時から、ホテルニューオータニ「鳳凰の間」において参集式を行い、続いて13時から歓迎レセプションを行った。

参集式では、はじめに、加藤勝信内閣府特命担当大臣からあいさつがあり、続いてPYを代表して Mr. Muhd Hafizh Abd Khalid(ブルネイYL)がスピーチを行った。

歓迎レセプションでは、高鳥修一内閣府副大臣があいさつし、その後、高木宏壽内閣府大臣政務官が乾杯の発声をした。

各国NLとPYは、第42回「東南アジア青年の船」事業のはじめりに心を新たにしつつ、初めて会う友人たちと歓談を楽しんだ。

3 日本・ASEAN ユースリーダーズサミット

(1) 概要

10月31日～11月3日、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて日本・ASEANユースリーダーズサミット(YLS)を開催した。

YLSは、日本とASEAN各国及びASEAN各国相互の連携を強化するために、より多くの青年が日本とASEAN各国を結ぶネットワークに参加することを目的として、駐日ASEAN各国大使館及び国際機関日本アセアンセンター(東南アジア諸国連合貿易投資観光促進センター)と連携し、ディスカッション及び文化交流を中心とした合宿型プログラムを実施するものである。

10月31日及び11月1日にはローカル・ユース(LY)への事前研修を行い、各国NL・PYは11月1日午後地方プログラムから帰京後、LYと合流した。

(2) 開会式

11月2日10時から、カルチャー棟大ホールにて、駐日ASEAN各国大使館代表者及び関係者列席のもと、YLS開会式を行った。はじめに、武川光夫内閣府政策統括官があいさつした。次に、駐日ASEAN各国大使館を代表して、フィリピン共和国大使館公使のMs. Angelica C. Escalonaがあいさつした。引き続き、PYを代表して、Mr. Andika Sasmita Pratama(インドネシアYL)があいさつした。

開会式及び日本・ASEAN文化交流プログラム(パフォーマンス、展示)には、公募による一般来場者約100名が参加した。

(3) 日本・ASEAN文化交流プログラム

a. パフォーマンス

11月2日13時20分から、カルチャー棟大ホールにおいて、「日本・ASEAN文化交流プログラム」を開催した。日本とASEAN各国のPYが、「日本・ASEAN文化交流プログラム」のテーマである“Hello, new friends from Asia! ~ Let's make a friendship for our future ~”

のもとに各国3分間の文化紹介(パフォーマンス)を行った。各国PYは鮮やかな民族衣装を身にまとい、歌や踊りなどで会場を魅了した。そして、各国パフォーマンスの最後には、11か国22名のPYとLY2名は合同パフォーマンスを披露し、盛況のうちに終了した。



b. 展示

パフォーマンスに続き、11月2日14時から、国際交流棟レセプションホール及び国際会議室において、各国を紹介する展示を行った。



各会場にそれぞれ6ブースを配置し、参加各国及び国際機関日本アセアンセンターに1ブースずつ割り当てた。ASEAN各国の展示ブースは、各国PYが駐日大使館の協力を得て準備し、各国の政治・経済・社会・文化などを紹介した。また、LYも担当国ごとに準備に加わり、各国PYとの交流を深めた。各国とも相互交流が可能な伝統的な遊び・踊りなどを紹介し、参加者がブースを回ることによってPYとより身近に交流できるよう工夫した。また、レセプションホールには、スナックコーナーを設け、参加者は各国の珍しいお菓子の試食も楽しんだ。

(4) ディスカッション活動

ディスカッション活動のテーマには「青年の社会活動への参加～だれもが共生できる社会を創るために、青年としてあなたができることは何ですか～」を設定した。日本とASEAN各国の青年が自身を取り巻く地域社会とそこにある課題に目を向け、だれもが共生できる社会について議論することで、その社会の実現に向けて、青年がどのように貢献できるかを見だし、今後の社会活動への積極的な参加へとつなげることを目指して実施した。

まず、10月31日に、LYに向けた英語によるディスカッションのための講座を行った。LYはYLSディスカッションの重要なポイントと、英語でのディスカッションの基礎を学び、練習を行った。また、11月1日の

午前中には、LYのみでのディスカッション・グループ活動を行った。同日夜には、八つのディスカッション・グループ別にLYとPYを交えたディスカッション・グループ活動を行い、自己紹介やアイスブレイキング、テーマについての意見交換を行った。

11月3日の午前中には、ディスカッションテーマについての具体的な事例や考察を全体で共有し、ディスカッション活動の基盤とすることを目的として、基調講演を開催した。独立行政法人国際協力機構国際協力専門員である石川幸子氏が「私の東南アジアへの旅 3Eの向こうに ~Empathy 共感、Experience 体験、Engagement かかわり~」と題し、約1時間にわたる講演と質疑応答を行った。その後、コーディネーターのリードによりグループ別ディスカッションを行った。LYにとっては、ディスカッションのテーマについての様々な見解を得る機会となり、また、PYにとっては船内におけるディスカッション活動への有益な導入の場となった。

同日午後、各ディスカッション・グループはディスカッションの成果を全体会にて発表した。参加者は、だれもが共生できる社会とはどういう社会なのかを具体的にイメージし、また、その社会の実現には青年が大きな役割を担っているという共通認識を持ち、その実現に向けて各自が担える役割と今後の活動についての考えを深めた。



日本・ASEANユースリーダーズサミット2015 基調講演

私の東南アジアへの旅 3Eの向こうに

～ Empathy共感, Experience体験, Engagement かかわり ～

石川幸子氏

(独立行政法人国際協力機構 国際協力専門員)

平成27年11月3日

皆さんおはようございます。元気でしょうか。元気そうですね。まず、日本・ASEANユースリーダーズサミット2015の主催者である内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センターに対し、ASEANの国々と日本の400名を超える青年と出会い、また、私の考えや経験を皆さんと共有することができるこのすばらしい機会を与えてくださったことに感謝申し上げます。

昨夜、私は今朝ここに来ることを考えると、わくわくしてよく眠れませんでした。まるで初めての遠足が待ち遠しい小学生のようでした。今朝、オリンピックセンターで皆さんに会うことを本当に楽しみにしていました。それには二つの理由があります。

一つ目の理由は、まるで約30年前の自分を、皆さんの中に見つけるかのような気持ちになったからです。私も1981年に皆さんと同じ「東南アジア青年の船」事業、SSEAYPに参加しました。(まだ皆さんは生まれていなかったかもしれませんが)それは私にとって2回目の海外旅行の経験でした。私は日本参加青年の仲間たちや、これから友となるASEAN各国の仲間たちと共にこれから始まる船のプログラムに期待して胸を高鳴らせていました。しかし、正直に言うと、これからの船旅と寄港地活動で何が起るのだろうと少し不安な気持ちもありました。今日、私は皆さんに会い、そう、まさに自分の時のことのように皆さんの気持ちが分かります。皆さんはわくわくしていると同時に何が起るかわからない、これからの1か月半が少し心配でもあることでしょう。

二つ目の理由ですが、私は皆さんがこれからの船のプログラムやユースリーダーズサミットを通じてどのように変わるのかとても関心があります。日本人ローカルユースの皆さん、ASEAN諸国の皆さんを迎え、彼らの文化を知り、彼らに出会えるのは本当に幸運なことですね。皆さんの中にはユースリーダーズサミットの経験にとっても感銘を受け、来年、又は数年後にはSSEAYPの仲間に入りたいと思っている人もいることでしょう。私は皆さんを激励し、次のようにアドバイスします。それは、「自分にとって居心地の良い場所から抜け出して新しい友達を作り、この経験から得られる全てのことを味わい尽くす」ということです。

明後日っぽん丸に乗船する皆さん、仲間入りおめでとう。そして良い旅を！皆さん、千差万別の背景を持つ

友人たちの間で自分自身について新しい切り口を発見してください。異なった文化や風習に対する自分自身の柔軟性に欠けた反応にショックを受けるかもしれません。また、その国の歴史や何千年も積み重ねられた叢智に魅了されることもあるかもしれません。そうですね、自分のポジティブな、そして、ネガティブな反応の両方を受け入れてください。それは自然な始まりの姿です。

今日、私は「青年の社会活動への参加」という、ディスカッションの共通テーマに沿って何か話すことになっています。とても大きくてシリアスな内容ですよ。このテーマについて皆さんに伝えたいことがいくつかありますが、まずは、私の経験を皆さんと分かち合うことに決めました。というのも、そのほうが何か理論的なことや非現実的なことを言うよりも説得力があると思うからです。

■ 3Eとは何か

このようなわけで私はこのスピーチの題名を「私の東南アジアへの旅～3Eの向こうに」と名付けました。皆さんは3Eが何か分かりますか。皆さんは3Rは御存知ですよ。 「Reduce減らす」「Reuse再利用」「Recycle再生」ですね。環境キャンペーンの言葉です。私はそれらの代わりに、今日のディスカッションのために3Eを考え出しました。それらは「Empathy共感」「Experience経験」「Engagementかかわり」です。これらの3Eはより良い社会、より良い世界のためにどんな貢献ができるかを考える際に特に注意を払うべきキーワードです。これらは実のところ、ここ数十年の私自身の経験から学んだことです。今日は3Eの持つ不思議な力を皆さんと共有したいと思います。では、始めましょう。

■ 34年前のSSEAYPを振り返って

1981年、つまり34年前の私がSSEAYPに参加した時の写真をお見せしたいと思います。御覧のとおり、っぽん丸は皆さんが乗船するものよりもずっと小さいですね。1981年にはASEAN加盟国はたったの5か国でした。インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、そして、タイです。当時、各国及び日本からは35名ずつ参加青年が参加していて合計210名でした。寄港国では多くの歓迎会に参加しました。これはバンコクの首相官邸で、インドネシア、マレーシア、フィリピン

からの参加青年と私たちのホストファミリーです。文化紹介の練習も相当しました。(皆さんもきっとたくさん練習していますね。)私は「琴」という日本の楽器を演奏しました。同期の日本参加青年は日本舞踊の練習に励んでいました。船上では中身の濃い文化交流のタベが行われました。様々な文化や習慣を理解する良い機会でした。

私の隣にいるのはマレーシアのキャビンメイトのジャネットです。私たちは34年間連絡を取り合っています。2002年に大きな国際会議のために数か月間クアラルンプールで仕事をしたときに、ジャネットは母親のように私の面倒を見てくれました。車で送ってくれたり、食事をさせてくれたり、クアラルンプールでやるべきことや、やらないほうが良いことなどの役に立つアドバイスをたくさんしてくれました。私は彼女の友情に本当に感謝しています。

クラブ活動もありました。皆さんは船上でクラブ活動はありますか。あるのですね。私は空手クラブに入りました。私は(写真の)真ん中にいます。まじめそうですね。私たちはASEAN事務局も訪問しました。1981年にジャカルタでオープンしたばかりでした。まさか、25年後に自分がそこで働くとは想像もしていませんでした。

私が古い写真を皆さんに見せたのはなぜだと思いますか。私が船のプログラムを通じて様々な国から来た大勢の友達を作ったこと、そしてそれが私にとって「共感」という感覚を育むのに役立ったということをお伝えしたからです。他の二つのE、「経験」と「かわり」については後でまた見ていきたいと思いません。今は「共感」という言葉を覚えてください。

■ 恩返しをしたいと思う

船のプログラムを終える時には、私は自分の立ち位置や自分がかかわる人々、そして自分の知識をもっと広げたいと思うようになりました。そのようなわけで、私はオーストラリアのキャンベラで国際法の勉強を続けました。(写真は)私のオーストラリア人のクラスメイトたちです。時々、私は農場でトラクターも運転しました。もちろん、遊びで乗っていただけですよ。

キャンベラでの勉強を終えてからも世界を旅することへの私の興味は尽きませんでした。日本にまっすぐ帰ることは全く考えませんでした。そこで、ASEANの国々のどこかで働けるよう国連機関に応募したのです。幸運にもUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)に保護官、法務官として、1985年7月にバンコクの事務所に配属されました。このビルが、私が働いていた建物です。今は改築されてバンコクに新しいビルがあります。私は世界中から来た同僚と働くのが大好きでした。これは私のオフィスで、デンマーク人の上司とタイ人の秘書、カンボ

ジア人の通訳です。もちろん、オフィスにいるよりも現場に出て、難民の人たちと話をする方が有意義で好きでした。難民は非常に困難な状況にあっても、この地球上のどこであろうと自らの将来を追い求めようという強い意志を持っています。タイの様々なキャンプで困難から立ち上がる強靭性について難民の人々から多くを学びました。

船のプログラムを通じて「共感」という感覚は身につけていましたが、様々な社会的、文化的な場面でその共感力をいかすための訓練が必要でした。オーストラリアで学んだこととバンコクのUNHCRでの最初の仕事のおかげで、悲観的になったり、不安感を抱いたりせずに、様々な社会的、文化的な状況に適応していくことができました。これは私の経験の一例です。詳しくは後でまた話しましょう。

「共感」を抱いて様々な社会的、文化的な状況を行き来して経験を積み重ねていくと、社会や世界に恩返ししたいと思うようになりました。私はこれを「かわり」、または「決意」と呼んでいます。初めに私はSSEAYPに恩返しをしたいと思い、1990年にナショナル・リーダーとして日本青年を引率しました。その頃ASEANはブルネイを新メンバーとして迎えて6か国となっていました。私は船上で若い人々と経験や考えを共有することを楽しみました。(写真の)彼らは、私がナショナル・リーダーだったときの参加青年で、日本やその他の国でいまだに連絡を取り合っています。

ナショナル・リーダーの任務を終えた後も、私はASEANを離れることはありませんでした。タイを拠点にして東南アジアを旅し、カンボジア、ラオス、ミャンマーとベトナムがASEANのメンバーになるための協力に関与しました。この写真はベトナムがASEANに加盟して間もない1996年1月にハノイで実施した「AFTA」と呼ばれるASEANの自由貿易圏に関するセミナーです。1995年にベトナムがASEANに加盟し、1997年にはラオスとミャンマーもそれに続きました。カンボジアが10か国目の加盟国になった1999年には、悲願だった「ASEAN10」が実現しました。

1999年は私にとっても思い出に残る年です。私が現在働いている組織、国際協力機構(JICA)に移った年なのです。同僚と共にJICA-ASEAN地域協力会議、略してJARCOMを立ち上げました。これは日本とASEAN各国が地域での協力事業について話し合い、実行するための仕組みです。2008年、タイのスリン・ピッサワン博士がASEAN事務総長に就任した年、JICAとASEAN事務局が協力協定を締結し、いくつかのプロジェクトが始まりました。私はASEAN事務局の人々とかなり多くの議論を重ねてきました。SSEAYPから25年が経ち、またASEAN事務局へ戻ったのです。私はASEAN各国の大使との議論も楽しみました。彼らと仕事上良い関係を築

けたのは大変幸運なことでした。

■「ASEAN式」の仕事のやり方

とはいえ、JICA-ASEAN協力の点からすると、「ASEAN式」と呼ばれる物事の進め方には難しさを感じることもありました。ASEANには独自のルールとして不干渉主義でかつ満場一致の決議方法という「ASEAN式」のやり方があるのです。画期的なプロジェクトに対して、大使やASEAN事務局スタッフの承認を得て協力してもらうためには、「ASEAN式」との微妙なバランスを保ちながら、彼らと激論を交わしたこともありました。また、ASEAN事務局では「開発格差是正に向けてのレクチャーシリーズ」に協力する機会にも恵まれました。

■息子をテロリストにしないために

私の仕事は、東南アジア域外へも拡大していきました。平和学の専門性をいかして平和構築にかかわり、イラク、アフガニスタン、スーダン、スリランカ、東ティモールといった紛争地域の政府職員や学者への研修を実施しました。

イスラエルとパレスチナへも平和構築研修とプロジェクトで3回訪れました。これはエルサレムの岩のドームの写真です。美しいですね。これはパレスチナ人の母親とその息子の写真で、私のお気に入りです。母親が母子手帳を持っているのが見えますか。これはきちんと健康を管理するために、母と子の健康状態を記録できるように、日本が紹介したものです。

ある日、パレスチナのラマツラで一人の母親をインタビューしました。彼女はこの母子手帳をずっと取っていて、息子が大きくなったら見せるのだと言うのです。どうしてですか、と私は尋ねました。この手帳を見れば、自分がどれほど両親から愛されてきたか、そして、今もなお愛されているということを感じるだろうから。そうすれば、自爆テロリストになったりしないだろうから、とその母親は言ったのです。私は彼女の切実な願いに胸を打たれました。これは、私の「かかわり」という感覚、「決意」という感覚を強固なものにした出来事の一つでした。

後に、私はスイス政府から和平調停のトレーニング・コースに招かれ、自分の能力を向上させることができました。私の平和構築の仕事でもっとも際立ったものは、マレーシア科学大学とミンダナオの合同平和セミナーを実施したことです。これは政府職員、MILF、そして非政府組織、学者と宗教指導者たちを一堂に集めて行われた、非公式な和平調停会合です。この写真は昨年、広島で行われた会議の様子です。これらの活動は全て私の「かかわり」という感覚から生まれたものです。これまで、私は1981年にSSEAYPに参加してから3E

(empathy, experience and engagement) の感覚をいかに育んできたかをお話してきました。これらは皆さんが社会や世界で貢献について論じる際に役立つキーワードになると思うのです。

■「共感」とは

それぞれの言葉について考えてみましょう。「共感 (Empathy)」とは、理解すること、想像力を豊かにして他の人の感情の中に入っていき、あるいは、他の人の状況や感情、動機を認識したり、理解したりすることとも言えるでしょう。そうですね、(写真の中の)赤ちゃんにさえ「共感」という感覚があります。言い換えれば、他の人の立場に立ってみるということです。共感する力を育てる一番良い方法は、まずは友達を作ることです。例えば、ミャンマーに友達がいたら、2008年にナルギスのようなサイクロンがミャンマーを襲ったら、心配せずにはいられないでしょう。彼らを助けるために何かしたいと思ったことでしょう。それが「共感」です。もし、フィリピンに親しい友達がいたら、台風ハイヤン(又はヨランダ)がレイテ島を壊滅するのを見てパニックになったことでしょう。これが「共感」です。私自身、2011年の大地震と津波の後、世界中の友達からメールと電話をたくさんもらいました。それが「共感」というものです。皆さんはこのコースリーダーズサミットとSSEAYPの期間内に良い友達を作り、「共感」という感覚を養う機会があると思います。そのことはこれからの経験の機動力になると思うのです。



■「コンテクスト(文脈)」を理解することの重要性

辞書によれば、経験とは、実際の出来事や活動からもたらされる知識や技能の積み重ねであると書いてあります。そこに私なりの意味を付け加えたいと思います。そ

れは、様々な社会や国というコンテキストを理解し順応することです。オーストラリアのキャンベラで学生として様々な活動に参加したこと、UNHCRの職員として活動したおかげで、一般的には「コンテキスト」と呼ばれる異なる社会的、文化的背景への理解が深まりました。私は「共感」を用いて様々な高コンテキストや低コンテキストの社会に適応できるようになりました。

文化人類学者のエドワード・ホールによると、高コンテキストの文化において、コミュニケーションのルールは、主にボディ・ランゲージや人の社会的地位、声の調子といった文脈を包含する要素を用いることによって伝えられ、はっきりと言葉にして伝えられることはありません。これは、情報が主に言葉を通じてやり取りされ、ルールが全て詳しく説明される低コンテキスト文化とは正反対です。

例えば、日本はかなりの高コンテキスト社会だと考えられています。私は他の日本人とやり取りする際、すべてを言葉にする必要がありません。私たちはこれを、空気を読むという習慣だと考えています。これに対し、オーストラリアは低コンテキスト社会です。オーストラリアで学生だった頃、自分のことを分かってもらうためにかなり話をしなければなりませんでしたが、でも、国連はもっと大変だったのです。人種のつぼで、あらゆる国籍の人がいて、コンテキストなるものは存在しないのです。とにかく話さなければなりませんでしたが。特に、ヨーロッパやアメリカの人と差し向かいで話をする場合には、声を大きくしたり、ジェスチャーを使ったりして話さなければなりませんでしたが。しかし、ひとたびバンコクの国連ビルから出ると、心のチャンネルを切り替え、国連とは異なるタイのコンテキストに合わせなければなりません。心を落ち着けて、優しいタイの人々と穏やかに話す必要がありました。難民キャンプに行けば、タイの社会とは異なるコンテキストが存在し、再度、私の心のチャンネルを切り替えなければなりませんでしたが。

■ あらゆる状況に適応するために

しかし、様々なコンテキストに合わせて心のチャンネルを切り替える際にはいつも「共感」の感覚が私を正しく導いてくれたのです。このようにして私はあらゆる社会や文化という状況に適応できるようになりました。こういったことは、様々な社会的、文化的な状況に対応する際に皆さんにもやっていただきたいことです。これが外国文化にのみ有効だというつもりはありません。身近な状況にも役に立つのです。弱い立場の人々というコンテキストに合わせて心のチャンネルを切り替えると、また違った景色が見えてくることでしょうか。「共感」や「経験」が「かかわり(engagement)」という感覚をもたらすはずですが。「かかわり」には、たくさんの意味があ

ります。でも、ここで私が強調したいのは、社会や世界の一員として、献身的な態度、責任感、他の人のために喜んで何かをしたいという気持ちのことです。私の写真をお見せしましたが、何かお返しをしたいという私の思いは、SSEAYPのナショナル・リーダーであったり、日・ASEAN協力であったり、平和構築といった形になって表れました。いずれ、皆さんも社会や世界に貢献したいという強い願いを持つことでしょうか。この点については後ほどお話ししましょう。

■ 恵まれているからこそすべきことがある

「共感」、「経験」、「かかわり」について話してきましたが、理解しておくべきもう一つの重要な感覚について付け加えます。それは「ノブレス・オブリージュ」というものです。これはフランス語ですが、英語では「ノーブル・オブリゲーション(高貴なる者は義務を負う)」といいます。「ノブレス・オブリージュ」のもとの定義は、身分や社会的地位が高く、裕福な者は、身分が低く、貧しい人を助け、寛大でなければならないという19世紀の考え方から来ています。今日、この定義は皆さんにも当てはまります。皆さんは健康で、非常に良い教育を受け、ユースリーダーズサミットに参加しています。皆さんの前途には明るい未来があります。つまり、皆さんは恵まれていて、困っている人々に何かしてあげる義務があるということです。皆さんが世の中をより良くしないのであれば、誰がするのでしょうか。皆さんです。他の誰でもなく、皆さんこそが世の中を良くするのは、このことを覚えておいてください。(会場から拍手)約束してくれるのですか。どうもありがとう。



■ 三つのレベルで私たちにできること

それでは、三つのEの恵みと、「ノブレス・オブリージュ」という感覚と共に、本日の皆さんのディスカッション・テーマ「青年の社会活動への参加 ~だれもが共生できる社会を創るために、青年としてあなたができることは何ですか?~」について考えていきましょう。このテーマは三つの異なったレベルで話し合えるかもしれませんが、主に、国内、ASEANと日本、そして世界です。まず、国内から始めましょう。どの国も所得格差、

教育を受ける機会に恵まれないこと、不十分な医療といった社会的な課題を抱えています。皆さんもいろいろ例を挙げることができるでしょう。高齢者、子供、少数派の人々、場合によっては女性といった社会的弱者がいつも世間から疎外されています。この場合、特に最も弱い人々のことを考え、積極的に皆さんのレベルでできることに取り組んでください。今日、様々な文化的、社会的背景を持つ皆さんの友人たちから問題を解決する方法を学べるかもしれません。

では、次のASEANと日本のレベルに進みましょう。ASEANは統合と連結を目指しています。ASEANは本年末までに単一の市場を創設することによって、経済統合を達成しようとしています。ASEANは、また、インフラの連結性に焦点を当てた「ASEAN連結性（コネクティビティ）」と呼ばれる取組を開始しました。大規模インフラプロジェクトや経済統合プロジェクトはASEAN政府に委ねることができますね。政府の方がこうした取組は得意でしょうから。

しかし、皆さんにとってより重要なのは、ASEAN加盟各国において人々を統合し、連結させることに注力することです。こういった点に関し、何ができるでしょうか。これは本日の話合いのもう一つのポイントになるでしょう。皆さんはこのコースリーダーズサミットやSSEAYPで学んだことを帰宅してから他の人と共有し、ASEAN親善大使になることができます。私が提案したいのは、船事業の事後活動組織が10の加盟国にあるネットワークを活用してASEAN協力にいつそう積極的に取り組むことです。日・ASEAN協力という観点ではどのようなことができるでしょうか。日本とASEAN各

国のライフスタイル、ボランティア、高齢化社会などお互いが学び合えるような共通の関心事がたくさんあるにちがいありません。ボランティアの交流というアイデアもいいかもしれません。SSEAYPの事後活動組織や友人たちと連絡を取り合って、学びを新たにしていくことも大切です。このようにして、ASEAN各国や日本の友人たちと話し合った計画を実行する機会が得られるでしょう。

最後は、世界レベルです。私たちは皆、同じ船に乗っていて、環境、病気、紛争、難民、テロといった問題を無視することはできませんし、これらマイナスの要素を和らげるために何ができるかを考えなければなりません。皆さんのレベルでできることをするのは、恐れずに小さなことから始めてください。大切なのは、世界規模の問題を自分自身の課題として関心を持つことなのです。日本のことわざにもありますが、それらは対岸の火事ではないのです。

皆さんにはもう一度このスライドを見ていただきます。皆さんは、私が三つのレベルで示した課題や問題に取り組むべき人々であることを思い出してください。私の講演を終える前に、誇りをもってこの最後の写真をお見せしましょう。1981年のSSEAYPは30周年の同窓会を2012年にシンガポールで実施しました。（会場から拍手）どうもありがとう。これまでの日々、私たちは「共感」、「経験」、「かかわり」という感覚を抱きながら連絡を取り続けてきたのです。だからこそ、私たちは大きな成果として「友達」という名の財産を得ることができたのです。ありがとうございました。

4 ホストファミリー代表者の招へい

訪問国における長年にわたるPYのホームステイ受入れの実績に対して感謝の意を表明するとともに、日本国内活動などの各種プログラムを体験することにより「東南アジア青年の船」事業への理解を更に深め、各国におけるホームステイ受入れを円滑に進めることを目的として、各国のホストファミリー代表者を7か国から2名ずつ、合計14名を日本に招へいた。

ホストファミリー代表者は10月27日から31日までの5日間の日程で日本に滞在し、第42回「東南アジア青年の船」事業参集式に参加したほか、安田貴彦内閣府青年国際交流担当室長への表敬訪問を行った。また、東京近郊にて、2泊3日のホームステイを体験した。



ホストファミリー代表者が安田貴彦内閣府青年国際交流担当室長を表敬訪問する（10月28日）

5 船内公開・出航式

11月5日13時30分から、PYの家族・友人、事業関係者などを対象として、東京港からの出航に先立って、にっぽん丸の船内公開を行った。

その後、15時15分から、にっぽん丸ドルフィンホールにて、駐日ASEAN各国大使館代表者及び関係者列席のもと、出航式を行った。安田貴彦内閣府青年国際交流

担当室長及び佐藤恵一日本青年国際交流機構会長から激励のことばを受け、PYを代表してMr. Xavier Chia Pik Yang（シンガポールPY）があいさつを行った。

出航式終了後の16時00分、にっぽん丸はフィリピンに向けて東京港晴海ふ頭から出航した。



出航式にて、安田貴彦内閣府青年国際交流担当室長が激励のことばを述べる（11月5日）



出航の見送りに来た家族や友人